

地域の中で生きる「水」

それは小学三年生の夏休みのことだった。私の通っていた小学校では、毎年夏休みの宿題として自由研究をすることになっていた。三度目にしてすでにテーマを何にするか迷っていた私に、母が薦めてくれたのが「カバタ」だった。はじめて聞く言葉だなあ、と不思議に思いながら、「カバタ」について調べてみることにした。滋賀県の針江地区に残るカバタ。漢字では、「川端」と書くそう。地下から湧き出た水を大きな囲いに流し、そこで野菜を洗ったり、果物を冷やしたり。あるいは湧水を飲んだり、沸かしてお風呂に溜めたりする。そのスペースを「カバタ」と呼ぶのだと言う。幼い頃から美味しい水が大好きだった私は、すっかり「カバタ」が気になって仕方なくなり、それを自由研究のテーマに決めたのだった。

奈良市立富雄第三中学校 三年
落合 一葵

針江集落を見学するためにはガイドを申し込まなければいけなかったため、すぐに見学を申し込み、早速夏休みの中頃に針江へ向かった。琵琶湖のほとりに位置するとは言え、夏の針江は暑かった。しかし、受付を済ませて集合場所へ向かってみると、目の前には大きな川がこんこんと流れていた。それには道の端にはどこまでも続きそうな水路があり、それをのぞきこんでみれば、何匹か鯉が泳いでいる。川のせせらぎを聴き、悠々と泳ぐ鯉を見つめて、幾分か涼しくなった心持ちでいれば、ガイドの方がやってきた。私たちは、ガイドの方に案内していただきながら、様々な家のカバタを巡った。空き地の片隅、家屋から少し離れた小屋の中、おうちの庭。様々な所にあるカバタを訪れながら、たくさんのことを体験させていただいた。一つ目に訪れたカバタでは、実際に湧水を手ですくって飲ませてもらった。両手いっぱいにくくった水はとてもひんやりしていて、

暑さで溶けそうだった手のひらが一気に冷たくなった。

「いただきます。」一言つぶやいてから、口に水をふくんだ。身体がすーっと冷やされて、ぱーっと甘みが口の中に広がる。これはおいしい。夏の暑さがかうそみたいに飛んでいくのが心地よくて何度も飲んでしまった。

最後に案内してもらったカバタでは、そのカバタで冷やされたきゅうりを食べさせていただいた。あまりきゅうりが好きではなかったけれど、せつかくのもらいものを残すわけにもいかず、塩をかけて思いきりかじりついた。つめたくて、みずみずしくて、とてもおいしかった。他にも、湧水を利用しておとうふを作ったり、お酒をつくって町の中で商いをしていられるお店もあって、針江では「水」が暮らしを支え、よりよくしていると分かった。

また、ガイドが終わった後、町の大きな川で地域の子どもたちがたくさん遊んでいる姿を見た。その楽しそうな様子に、改めて「こんな暮らし、いいな。」と思ったのだった。

帰宅後、自由研究の内容を模造紙にまとめながらメモや写真を見返した。心にあふれるのは、「また行きたい！」という気持ち。それはきつと、針江と

いう地域で生きる「水」がとても爽やかで美しいものだったからだと思う。針江の人々は、地下から湧く水のことを、「生水」と書いて「しようず」と呼ぶそうだ。地域の人々と、昔からずっと共に生きてきた湧水に、ぴったりな名前だと思った。いつか私の町にも、生水が溢れたらどんなにいいだろう。文明に頼るばかりではなく、暮らしに自然を取り込み、保全活動で恩返しをする。そんな針江の人々のような生活が、日本中であたりまえになるように、私も自然に寄りそって暮らすべきだと思った。